心理療法における「賭け」について

——Philobatism との比較による分析——

森　　茂　　起

On "Taking Chances"[1] in Psychotherapy

MORI Shigeyuki

この論文の目的は，人間にとって大きな意味を持つ「賭け」という現象を，Balint の理論を手がかりにして分析し，その臨床的意義を明らかにすることである。そもそも筆者がこのような視点を持つに至ったきっかけは，筆者が行った治療の中で体験した心の動きが，「賭け」の現象と非常に似かよっていると感じていたとき，「賭け」を一つのスリル体験と考えると Balint (1959) の著作「スリルと退行 (Thrills and Regressions)」の中の記述が筆者の体験によくあてはまると気付いたことである。後に考察を進めるにつれ「賭け」と Balint のいうスリルを等しいとすることはできず，複雑な関係にあることが明らかになったのであるが，この視点は心理療法の中で生起する事態を理解するために有用であると思われた。以下に一つの試論として述べたいと思うが，「賭け」について触れる前に「スリルと退行」の中で展開されている Balint の理論を紹介しておかねばならない。

1. Philobatism と Ocnophilia

philobatism と ocnophilia の概念は，primary love と共に Balint の理論の骨格をなすものであり，主著「治療論からみた退行 (The Basic Fault)」の中でも触れられているが，この両概念を提出し，両者についての分析を精密に行ったのが「スリルと退行」である。以下，この著作に従って philobatism と ocnophilia について概説したい。

Balint はまず，遊園地における楽しみを精神分析的に解釈していく中で，ジェットコースターなどに代表される「スリルによる楽しみ」に注目する。それが楽しみであることは自明なこととして認められるにもかかわらず，逆にスリルを恐怖する人がいることもまた明らかである。Balint は，この2つの心性はそれまでの精神分析的概念では説明できないとした上で，全く新しい術語——philobatism と ocnophilia——を導入する。いずれも，ギリシャ語から Balint が作った造語であり，「スリルを楽しむ人」という意味の philobat の形容詞形が philobatic，その抽象名詞形が philobatism，その反対概念として「確かなものにしがみつく人」を意味する ocnophil の形容詞形が ocnophilic，その抽象名詞形が ocnophilia である。それぞれ，スリルを好む心性と，スリルを恐れ避けようとする心性を表わしている。

「スリルを楽しむ」例としては，遊園地のジェットコースターなどのほか，古来からあるアクロバットがあげられる。これは，スリルを観客に提供するプロであり，観客は自分自身が危険に

さらされるかわりに，演技者を見てスリルを感じ楽しむのである。そこでは，スリルが大きいほど——綱渡りの綱が高いほど，空中に止まる時間が長いほど——観客の楽しみは大きい。また，Balint のあげる他の例では，子供の代表的な遊戯である「おにごっこ」がある。陣地（home）から離れて逃げ回りまた戻って来ることは一つのスリルである。ここでも，スリルが大きいほど——陣地から遠くへ離れるほど，長時間離れるほど——楽しみは大きい。こういった楽しみは世界のどこにでも存在し，この楽しみが原初的なものであることがうかがえるが，すべての人がこれを楽しみとして体験するわけではなく，スリルのある状況を嫌悪し，安全な状態に止まることを好む人達がいることも明らかである。

「スリルを楽しむ」という philobatism の現象を観察すると，上にあげた例でもわかるように一つのパターンがある。すなわち，ある安全な地点から自ら離れ，危険にさらされた後に再び安全な地点に戻るというパターンである。この philobatism の心性には，守りから離れ自分自身の力に頼るという自立的な印象があり，安全な地点から離れれば離れるほど自立性が証明されることになる。これは，象徴的には，母なる大地から飛び立ち，活躍し，再び戻ってくるヒーローのイメージである（これは，ユング派の言葉で言えば「永遠の少年」のイメージに近いものと考えられる）。

一方 ocnophil は，スリルを嫌悪し，何か安全な対象（object）にしがみつくことを特徴とする。たとえば，おにごっこにおいては陣地を離れたがらないであろう。崖っ淵に来たとすると，何らかの対象にできるだけ近付き，それによりかかり体を押しつける。つまり，何かにしがみつけば安全であると感じるのである。しかし，現実には，ocnophilic な反応は危険に際して安全をもたらすとは限らない。ロッククライミングにおいて，しっかり状況を把握し安全な岩に足をかけるかわりに，やみくもにしがみつくという行動をとってしまう。つまり，ocnophil は対象をしっかり見ることをせず，目を閉じ危険から顔をそむけ，自分が安全だと信ずるものにしがみつくのである。ocnophil にとっては対象こそが安全と感じられ，対象と対象の間の空間は危険に満ちていると感じられる。ocnophilic な世界とは，恐しい空虚な空間によって分離された対象からなっており，ocnophil は空間にいる時間をできるだけ少なくするようにしながら対象から対象へと渡って生きるのである。

philobatic な世界は正にこれの陰画をなす。philobat は，先のロッククライミングの例であれば，しっかり目を見開き対象を観察し，偽りの安全を与える対象から離れる。philobat にとっては，危険なのは対象であって，空間は安全と感じられる。たとえば，パイロットにとって危険なのは何か物体が空中に現われたとき，あるいは着陸のときである。スキーヤーにとっても，スロープに点在する木や岩が危険であって，それ以外の空間の広がりは安全である。つまり，philobatic な世界とは，危険で予測できない対象が点在している親しい広がりからなっているのである。

今，ocnophilia と philobatism の世界を対照して図式的に述べたが，この図式から見て一見正しく思われる「ocnophil は対象を愛し，philobat は対象を憎む」という性格づけは誤りであると Balint は述べている。ocnophil は危険に際し対象にしがみつくが，対象を愛しているとは言えず，自分の弱さへの軽蔑をおきかえ，対象を憎むことさえある。また，危険が去ると，対象自身の苦しみを顧みず，対象を捨てるのである。一方，philobat は対象を憎むかに見えるが，対

象が自分にとっての道具となるときには憎まない。たとえば，綱渡りを演ずる人が手に棒を持ったり，ライオン使いが鞭を持ったり，スポーツのプレーヤーが道具（バット，ラケットなど）を手にしたりするが，それらは philobat が自由に使うことのできる対象である。これらの道具は，象徴的には philobat が自ら離れてきた愛する母であり，他方では力強い phallus の象徴でもある。それゆえこれらの対象は philobat にとって魔術的な力を持つことがある。たとえば，スポーツ選手は，自分の気に入っている特定の道具を持つことで，魔術的な力を持っているように感じるのである。以上のように，対象は，ocnophil にとっても philobat にとっても両義的である。

さて次に，ocnophil と philobat が指向するものは何であろうか。両者にそのような行動をとらせるのはいかなる機制であろうか。この点について Balint は，両者とも我々が元来その中に生まれ，後にそこから離れてきた primary love の世界へ再び還ろうとする試みであるとする。ocnophil は完全な母としての対象を求め，対象に接触している限り安全で，自分の選んだ対象が自分にぴったり合うという幻想を持っている。この幻想は，Balint が primary love と呼ぶ根源的な世界の名残りである。しかし，ocnophil は対象を部分対象としてしか認識せず，対象がそれ自身の生活を持っていることを認めないので，常に裏切られる危険性がある。したがって，ocnophil が望む primary love の世界は幻想の中でしか手に入れることができないわけである。

これに比べ philobatism は，一見高度に発達した心性のように思われる。自己から分離した対象の存在を認め，それが自己の世界にとって障害物であるなら避ける。逆に，役立つものは道具として使いこなす。これは現実の外的状況を扱う能力，すなわち現実への適応性を意味するが，それと共に，philobatism の世界を生きて行くには自己批判の能力も必要とする。パイロット，登山家，曲芸師など典型的な philobat を想起すれば，彼らが外界を適確に判断し，自己を常に吟味していることがわかる。これらの能力はすべて個人的な skill である。すなわち，philobatic な世界を生きるには必ず skill が必要であり，Balint は個人的 skill が philobatism のエッセンスであるとさえ言っている。そして，philobat の究極的な目標は，この skill を完全なものにまで高め，もはや努力を必要としない地点にまで達することと考えられる。たとえば Balint のあげている例では，すぐれた曲芸師にとってボールは彼の望むところに飛び，望むところで止まるのであり，すでに自己から分離した対象であることをやめ，ステージの上は彼の精妙な skill によって作られた妖精の国と化すのである。skill を高めることによって世界を自分の思うままに征服すること，すなわち，自己から分離した対象を発見する以前にあった自己と世界との調和を作り出すことが philobat の目標と言える。ところが，ここで philobat は，自己の skill を信じ世界が自分に合わせてくれると信じているが，この信念は primary love の世界に由来する primitive な万能感に根ざすものであり，現実の危険を彼は軽視している。それゆえ，彼の万能感は完全に正当なものとは言えず，構造がなく原初的で対象のない友好的な世界への退行に基いているのである。このように，philobatism の世界は，一方で外界の現実への適応，細部への注意，自己批判など，他方で非現実的幻想への自己放棄という奇妙な二重性を持っているのである。

ocnophilia, philobatism の両者とも，発達的に最も初期に存在した我々自身と環境との「調和渾然体 (harmonious mixed up)」が，くっきりとした輪郭を持つ対象の出現によって破壊されたとき，その外傷体験に応じるための方法であると Balint は考える。すなわち，一つの方法は，対象が信頼でき，親切であり，必要なときにいつも存在し，使われることを決して気にせず反対

しないという幻想に基く ocnophilic な世界を作り上げることであり，もう一つの方法は，対象が現われ輪郭のない広がりの調和を破壊する以前の生活に逆上る philobatic な世界を作りあげることである。後者の世界は，primary love の世界に起源を持つ「根拠のない楽観」で色づけられている。

以上，Balint (1959) の「スリルと退行」に従って ocnophilia と philobatism の概念を粗描してきた。後に Balint (1968) は，「治療論からみた退行」の中で，基底欠損 (Basic Fault)領域に両者を位置づけ，退行患者の治療者は，「いつでも患者とともにオクノフィリア的 (ocnophilic) とフィロバティズム的 (philobatic) の両原始世界を往復する心構えが必要であり，時には両世界の彼方の一次関係まで行く心構えがなければならない」として，これらの概念を治療論に結びつけるのである。本論でも，後に治療論に結びつけて論じる予定だが，その前に「賭け」について一般的な考察をしておきたい。

2. 「賭け」と Philobatism

今までの論述は，Balint の「スリルと退行」によるものであったが，その中で ocnophilia と philobatism の説明のためにあげられた例が，アクロバットやパイロットなど身体的な活動ばかりであったことが気付かれるだろう。Balint によれば，これは説明を簡弁化するためであり，同じ心性は精神的領域の活動にも見られるという。たとえば，ある一つの理念や主義にしがみつくという心性が存在し，逆に，すでに存在する思想を離れ，新しい領域にあえて向う心性も存在するのである。それらもまた，ocnophilia と philobatism である。

ここで「賭け」という現象を考えると，それが一つの精神的スリルであることは誰しも認めるであろう。世の中に氾濫する「賭け事」において人は精神的スリルを体験し，そのスリルを楽しむ。確実で安全な世界（それは身体的な活動のように目に見えるものではないが）から離れ，可能性の広がりの中へ身を投じるわけである。また，「賭ける」ことを恐れ，確実で安全な世界に止まろうとする人々もいるはずであり，この2つの心性は，そのまま philobatism と ocnophilia に対応するかのように思われる。

過去から現在にわたり，いわゆる「賭け事」はいたるところに見出すことができる。それは大人の世界に限らず子供の世界にも見られ，夜店や駄菓子屋では「くじ」が常に変わらぬ魅力を持って子供をひきつけている。これらのいわゆる「賭け事」は一つの典型的な「賭け」であり，完全に偶然の世界に身を委ねてしまうものである。そこには大きなスリルが伴い，ある一定の安全の保障がある限りはそのスリルを楽しむことができる。しかし，「賭け」は，いわゆる「賭け事」だけでなく，さらに広い範囲に見られる現象である。たとえば，学力試験において十分準備ができず，やまをはって「賭ける」気持は誰しも理解できるであろう。あるいは，スポーツの試合において「今のプレーは賭けであった」という場面は容易に想像することができる。状況が難しくなり，確実な手段では勝つことができないような限界的状況にあるとき一つの「賭け」がなされる。それは，技術が不完全であるため賭けざるを得ない場合もあり，また，限界まで技術を高めていたとしてもなおかつ賭けていく場合もあるだろう。そういった「賭け」が成功したときに，確実に勝ったとき以上に喜びが大きいことは興味深い現象であり，「賭け」が人間にとっていかに大きな魅力を持つものであるかをうかがわせる。

また，先に philobatism の例としてあげた身体的な活動も，心理的な観点から見るとすべて「賭け」の要素を含んでいることに気付く。ロッククライミング，スピードレースなどでは，「命を賭ける」という言葉がしばしば使われる。命を失う危険性のある世界に向ってあえて自己放棄し，身を委ねることの魅力がそこにはある。同じ山であっても，新しいルートから登る，単独で登る，という具合に次々とさらに困難な限界状況が求められるのも興味深い現象である。山に登ること自体よりも，新しいより危険な状況へ「賭けて」いくことを求める心性がそこにはある。あるいは，人生における重大決定を下すときには，いかに熟考を重ねたとしても不確定で予測のできない部分が残り，そこは「賭け」になるであろう。このように「賭け」は，安全なものから離れてあえて危険に身をさらすものであり，philobatism と多くの共通点を持っていると思われる。

さらにここで，「賭け」と philobatism の類似点として「正当な根拠のない楽観」について考えてみたい。これは，philobatism の背後にある primary love の世界の名残りであり，友好的な広がりの中で自分が安全で無事 home に戻ることができるという幻想を philobat にいだかせ，現実に存在する危険性を軽視させることになる。「賭け」の現象においてはどうだろうか。まず，典型的な「賭け」である「賭け事」について考えてみると，そこでは次の賭けに対する「根拠のない楽観」が大きな役割を果たしていることがうかがえるであろう。一つの賭けで負けたときに生ずる「次は勝てる」という確信，「もう一回やれば取り戻せる」という楽観は非常に強いものと思われる。もしそこで「なぜ勝てるのか」と問われたとしても答えることはできないはずであり，可能性の広がりの中で自分は安全であるという幻想である。この幻想は次の賭けで失敗したとしても消えることはなく，さらに次の賭けへの幻想が生じる。こういった心性がいかに多くの損失を招いているか容易に想像できるであろう。これはいわゆる「賭け事」においてのみではない。登山などにおいて無謀な計画が原因と思われる遭難が起るのも同じ心理機制がそこに働いているのではないだろうか。「命を賭ける」と言えば聞こえがいいが，一歩間違うと単に命を落とすだけの結果に終わる。登山において「引返す勇気」がしばしば強調されるのも，「やればできる」という内からの声を退けることがいかに難しいかを物語っている。「賭ける」場合，常に，成功するであろうという期待があり，その程度は現実の可能性に照らせば不合理なものである。それは，可能性の広がりが自分に対して友好的であるという幻想であり，primary love の世界に起源を持つものと考えられる。

今までの考察で，「賭け」が一つの精神的スリルであり，「賭け」の心理と philobatism には重要な共通点があることを見てきた。一方，「賭け」が人間にとって強い魅力を持つにもかかわらず，「賭ける」ことを恐れ，できるだけ安全な道，予測できない事態の起らない道を選ぶ人もいる。このように「賭け」を恐れる心性を，そうした道をとることで安全であるという幻想に基づく ocnophilic な反応として解釈することは妥当であろう。彼らは「賭け事」は好まないであろうし，入学試験では確実性を第一に考え，命を賭けるような冒険は決してしないであろう。それでは「賭け」は philobatism の一例として philobatism に包摂されるものかと言うと，そうではないと思われる。まず，一つの典型的な「賭け」であった「賭け事」を考えてみよう。それは，可能性の中に自己放棄するという点で philobatism と共通するが，philobatism のもう一方の重要な要素であった skill はそこに存在しない。philobat は skill によって自分の思うままに

なる世界を現実の中に実現するわけであるが，「賭け事」では完全に偶然に身をまかせるのであり，自分の思うままの世界を作ることはない。そこには primary love の世界に由来する楽観が存在するが，その欲求は「賭け事」によっては満たされず，そのため虚しく繰り返すことになる。こういった「賭け」は，philobatism の中の自己放棄の面だけを持っていると言えるだろう。一方，先に述べたスポーツや登山や人生における「賭け」の中には「賭け事」と同じ面を持ちながら単に自己放棄とは言えない面を持ったものがあると思われる。スポーツにおいて技術を尽くした上で，あえて一つの「賭け」を行うことによって今までの能力の限界を越えたプレーができることがある。体操競技において新しい技を演じるとき，未登峰に登るとき，それは一つの「賭け」であるが，完全な自己放棄ではなく，十分現実吟味を行い危険性も認識した上で，主体性を持って「賭けて」いく。そのとき，今までと違った次元の世界が開かれる。こうした「賭け」においても philobatism と「賭け」の差違が見られる。skill を持つ点で両者は共通するが，philobatism の最終目標である skill を完全なものに高め外界を思うままにすることが「賭け」の目的ではなく，既に現在持っている技術で一つの世界を完成していたとしてもあえて主体的にその世界を放棄し，次元の違う世界を創造することを求めていると言えよう。

まとめると，philobatism は「賭け」と同じ世界を背景にしているが，「賭け」を目指しているのではなく，むしろ「賭け」のない世界を最終目標にしている。つまり，自分がそこから離れてしまったところの安全な世界を skill によって再創造しようとする試みである。それは幻想に基いており，現実吟味に失敗している。一方，「賭け」には，「賭け事」や，スポーツなどにおいて技術が伴わない場合に見られるような単なる自己放棄によるものと，現実吟味を持ち skill を獲得した上で「賭ける」ものとがある。後者にも危険は存在するが，その危険も認識した上での行為であり，philobatism のように確実な世界を完成しようとするのではなく，新しい世界の創造を行うものである。ただし，賭け事的「賭け」と創造的「賭け」は，同じ状況の中で容易に混り合うものであり，一つ間違うと賭け事的「賭け」に陥る危険性を持っていると思われる。この2種の「賭け」については次章でさらに論じる予定である。

さて，今まで「賭け」と philobatism の関係を考えてきたが，今までの考察をふまえて次に臨床場面における「賭け」について考えてみたい。

3. 心理療法における治療者の「賭け」

そもそも筆者が「賭け」について考えるようになったのは，筆者がある治療の中で体験した心の動きが「賭け」の現象に似通っていることに気付いたためである。これから，治療関係の中で治療者が経験する「賭け」，治療者側の ocnophilic な反応，philobatic な反応といった点について若干の考察を行うことにする。治療者の違いによる ocnophilic な偏向，philobatic な偏向という点については，Balint (1959) が既に述べている。彼によると，解釈を患者に与え，その解釈に患者がしがみつくように働きかける正統精神分析技法は ocnophilic に偏向しているという。そこでは，治療者は患者にとって全てを知っている偉大な対象となり，ちっぽけな患者が偉大な治療者にしがみついているという ocnophilic な構図を形成しやすい。逆に，philobatic に偏向した治療者は，解釈を控え目にし，患者が自分でやりぬいていくヒーローであることを望む治療者である。これは理想化された美しい像であるが，あまりに早く過大な重荷を患者に負わせる危

険性があると Balint はいう。正統精神分析技法が ocnophilic に偏っているとすれば，ユング派の分析家は全般に philobatic な傾向を持つように筆者には思われるがどうであろうか。

こうした，治療者の違いによる偏向の問題の他に，治療者の逆転移としての ocnophilic な反応，philobatic な反応という問題がある。Balint (1968) は，患者と共に治療者が ocnophilia, philobatism の世界へ入っていくことの必要性を説いているが，その時の治療者の反応，心の動きはどのようなものであろうか。後に少し触れるように，患者が ocnophilic な反応をするとき治療者も ocnophilic な反応をするとは簡単に言えず，複雑な関係があるように思われる。

さて，考察を進めるに際し，筆者の事例を出発点としたいと思う。患者は，怠学，盗みなどを主訴とする来談時15歳の男子中学生である。問題歴には，小学生の頃女性の下着を盗む，子鳥を殺して埋めるなどの問題行動があった。怠学など問題を起したとき母親はどうすることもできず，父親は叱るが全く上の空で聞いていないという状態であった。両親に連れられて来談したインテーク面接では，治療者に促されることなしに箱庭を作った。箱庭は，全面を動物達がひしめく中で，中央にライオンが閉じ込められた柵があり，その回りを銃を持った男が守るという情景であった。これは，患者の内的世界が原始的情動に満ちていると共に，それを守る枠がかろうじてあり，強い緊張関係にあることを感じさせた。治療を開始すると，備品を持ち帰りたいなど強い要求が次々と出，それが満たされないと激しい攻撃を治療者に向けた。また，治療者が「やらしいこと」をしようとしているという妄想知覚が出現するなど，治療者は激しい転移関係の中に巻き込まれていった。

このような状況で治療者は患者の行動を十分理解することができず，激しい要求や攻撃に辟易していたのであったが，それにもかかわらず，続けていくことによって「何とかなる」という気持がどこかにあり，面接を続けていた。それは，しりごみするのではなく，あえて危険に向っていこうとする philobatic な反応であったと言うことができるだろう。もしここで ocnophilic な反応を治療者がしたとすれば，危険を犯さず治療を中止することも考えられたはずである。そこで，治療者のとった反応を一応 philobatism と把えて，philobatism との一致点を考察してみよう。まず治療者の反応と philobatism の一致点として，philobat の現実吟味の二相性があげられる。すなわち，Balint (1959) によれば，philobat の現実吟味は，home にいるときと home を離れ広がりの中にいるときとで全く異るという二相性を持っている。home においては，philobat の注意は内界のみに向い，外界の現実を吟味する必要はない。ところが，広がりの中でスリルを体験しているときには，外的現実の吟味は正確で，すべての注意は外に向くのである。この事情は，試合前のスポーツ選手を想像すればよく解るだろう。彼らは，自分の道具以外の外界に関心がなく，気難しく考え込んでいる。(逆に，depression の過剰補償としての manic，すなわち過度にはしゃぐというふるまいもあると Balint は述べている。) そして，試会の始まった瞬間気分の転換が起る。治療者は，患者とのセッションが始まる前ちょうどこのような重苦しさ，外界への無関心を経験していた。そして，セッションが始まった瞬間全く違った気分の中に入っていた。こうした激しい転換を経験すること自体，治療者が philobatism の世界に入っていることの徴候であると思われる。

この現象と共に，極めて困難な状況にあったときでもどこかに「楽観」があったことが特徴であり，philobatism の「根拠のない楽観」に一致するものと思われる。実際，そのとき楽観の根

拠を尋ねられたとしても答えることができなかったであろう。

ここで，患者との転移関係という観点から，治療者の ocnophilic な反応及び philobatic な反応について少し触れてみたい。筆者の事例において治療者が philobatic に反応していたときの患者側のふるまいを考えてみると，それは治療者への様々の要求であり，治療者がその要求を満たすかどうかが患者にとって最大の関心事となっていた。これは治療者という対象へのすがりつきであり，Balint (1968) が患者の ocnophilic な反応として記述するものに一致する。ゆえに，ここでは患者の ocnophilic な反応と治療者の philobatic な反応という対応関係が起っていたわけであるが，この対応関係は一つの転移状況として出現しやすいように思われる。なぜなら，ocnophilic にしがみつかれる治療者は，自分自身の欲求を持つことは許されず，患者に対して ocnophilic に反応することはできないからである。治療者が ocnophilic に反応するとすれば，患者以外の何ものかに対してであって，例えばスーパーバイザーにしがみついたり理論にしがみついたりする。また，先に述べたように，治療を中止し「安全策」をとるということもできる。一方，この関係と全く逆の対応関係，すなわち患者の philobatic な反応と治療者の ocnophilic な反応という対応関係も起りやすいのではないか。患者が治療者に頼らず離れていこうとするとき，患者を引き止めておきたいという ocnophilic な反応が生まれがちのように思われるがどうだろうか。

さて，今まで治療者がとっていた態度を philobatic なものとして把えてきたが，philobatism のもう一つの重要な側面である skill についてはどうであろうか。治療者はその時点で患者という対象を十分把握することができず，適切な対応を行ったとは言い難いのであって，現実を把握する能力とそれに基き現実を取扱っていく skill が不十分であった。したがって，philobatic な指向性を持ちながら，むしろ2章で述べた賭け事的「賭け」に陥っていたと言えるだろう。ocnophilic な態度をとらずあえて治療に臨むことは一見英雄的であるが，Balint (1959) の言うように現実に存在する危険を軽視しており，「賭け事」において敗けがこむたびに賭け金を増やし破滅に陥る人のように，治療を続ければ好転するという「根拠のない楽観」に基いて続けたために決定的な失敗に至り患者を傷つける危険性がある。これは，skill のない「賭け」であり，現実吟味のない自己放棄である。ゆえに，そこで求められていたのは「賭け」を繰り返すことではなく，skill を獲得することであったと考えられる。その場合 skill とは，対象を観察する現実吟味の力と，治療者が自分自身を吟味する力であり，患者の言動の一つ一つの意味を丁寧に探っていきそれに応じた対応を行っていくことである。これは当り前のことのようであるが，「根拠のない楽観」が存在し安易に「賭ける」方に流されがちであるため，特に意識して行う必要があると思われる。

たとえば，ここで治療者の反応が philobatic なものであり「賭ける」傾向があるということを一つの転移状況として認識すること自体 skill の一つであると言えるだろう。実際，そう認識することによって治療者はいくらか安定することができ，治療を良い方向に転換するきっかけになったのである。これは一例であるが，ここで治療者にとっての「理論」の意味が浮び上ってくる。すなわち，治療者が患者や転移状況を把握するために使う「理論」は，philobat が使いこなさねばならない「道具」に相当するものとして解釈することが可能と思われるのである。1章で触れたように「道具」は philobat が使いこなすことのできる対象であり，たとえば，曲芸師が

綱渡りをするときに持つ棒，テニスプレーヤーにとってのラケットのようなものである。患者に対する場合，いわゆる「素手」で向うのではなく，何らかの理論的枠組を持つことの意味は大きい。また筆者は，ダイバーが水中に潜っているとき何らかの原因で水中めがねが外れるとパニックに陥り，非常に危険な事態になるという話を聞いたことがあるが，患者と共に深い世界に入っていかねばならない治療者にとって理論はこの水中めがねのような役割——深い世界を見ることができるようにして治療者を守る役割——を果たすと言えるだろう。そのとき，患者を把握するための理論は様々あり，たとえばフロイト派とユング派では同じ患者に対し違った把え方をするであろうが，いずれにせよ治療者がそれについて通暁し，いわば「手の延長」のようになった理論を使うことが必要である。この事情も philobat にとっての「道具」と同じであろう。ただし，philobat にとって道具という対象は，自らがそこから離れてきた母なる世界を想起させるものであるため，使いこなせない場合危険なものに変貌する。つまり，危険が迫ったときハンドルを適切に操作するかわりに単にしがみついてしまうドライバーのような行動をとってしまう。心理療法においても同じ事態が起るのであって，理論を使いこなすのではなく，理論にしがみつく危険性がある。理論の持つこの両義性に注意しなければならないであろう。

さて，著者の事例においては，ただ巻き込まれて見通しの立たないまま続けていた時期の後，Balint の著作などを通じある程度患者の心性を把握できるようになったわけであり，振り返ると賭け事的「賭け」の危険性を痛感するが，その後治療関係が進む中で治療者は別の種の「賭け」を経験することになった。治療開始一年弱を経過したころ，患者はプレイルームの中で一連の「死と再生」のテーマのプレイを行っていた。たとえば，患者自身が雌犬の役割をとり子供を生むが，子供を残して死んでしまうというプレイや，治療者の手足をバラバラに切ったあと生き返らすプレイなど死のテーマがたびたび現われていた。そうしたうちの一回で，患者が母犬役になり子犬を生んだあと，治療者にライフルを持たせ自分を射ってくれと迫ったことがある。治療者はこのとき，患者をプレイの中での象徴的なものではあれ「殺す」ことがどのような影響を与えるものか予測できなかった。あるいは「死なないでほしい」と言うべきかもしれないという気持も心をよぎったが，そのときの治療者のとっさの決断に従ってライフルを射つほうに「賭けた」。患者は死んだままじっと動かず，静かな時間が少し流れたあと別のプレイに移っていった。このときの治療者の「賭け」は，先に述べた初期の「賭け」とは違い，治療関係が発展しプレイの流れが生じ患者のプレイの象徴的意味が治療者に感じられるようになっていた時点での「賭け」であり，射つ方に「賭ける」ときの治療者の気持も先の「賭け」とは異っていた。この気持の差は，治療者の内的体験としてはっきりしており，一方を「弱い気持」とすれば他方を「強い気持」とでも表現できるような違いであった。また，前者が患者に振り回されている感じだとすれば，後者は治療者の主体性において「賭けて」いったと表現してもよい。この「賭け」は様々の治療的関与のうちの一つであり，この「賭け」がどのような結果に結びついたのか正確に言うことができないのだが，一つ言えることは，死んでいる間の静かな時間が他の時間の緊張に満ちたやりとりとは全く違う雰囲気を持っていたことであり，かつ，治療者が客観的にそれを眺めるのではなく，それをもたらした者として commit してその時間を体験できたことが大きな収獲であった。

この「賭け」は，skill を獲得した上で治療者の決断に従って主体的に行ったものであり，積

極的な意味を持つものと思われる。「賭け」のこうした面に近いと思われる概念に Balint (1968) の「新規蒔き直し (new beginning)」がある。それは，治療のプロセスの中の決定的な時期に患者が退行することによって予測できない過程が生じ転回点となって治癒に向うものである。ただし Balint は治療者側のそのときの体験にはあまり触れていない。そこで「賭け」のこの面にはっきり言及したものとして荻野 (1983) の分析を引用したい。彼は，Binswanger (1947) の症例——しゃっくりが続く患者にどのような治療を試みても止らず途方に暮れていたとき「賭けのようなひらめき」が起り，その患者の首を絞めるという行為を行ったところ治癒した——を引用して，「Binswanger の賭けは，でたらめな思いつきではなく，一回性と独自性を具えた時熟の一瞬になされたものであった」と述べる。その「賭け」は，患者との治療関係が深まっていったときに一挙に開示された治療状況であり，「まさしく時がそこで熟して実行に移された」のである。そして「本格的賭けはつねに，このような『時が満ちた』瞬時になされる」と言う。そして，そこから文明論に及び，ギャンブルがはんらんする現代社会には，本格的賭けはむしろ失われていると論じている。

筆者の体験した「賭け」は，Binswanger の症例のように一回の「賭け」によって決定的な治癒が起ったものではないが，その指向するものは同じであったと言えよう。それは，自己放棄としての「賭け」ではなく，skill を獲得した上での主体的なものであり，全く次元の違う世界を創造しうるものである。「賭け」にこの2種があることは2章でも論じたが，ここで仮りに，荻野が「本格的賭け」と呼ぶものを「真の賭け」，単なる自己放棄の賭け事的な「賭け」を「偽の賭け」と呼んでおこう。skill を伴わない「偽の賭け」は，先に述べたように primary love の世界を指向しながら真にそこに到達することができず，それゆえ虚しく繰り返すと考えられる。それは「真の賭け」の不在を補償しようとする試みであり，そこから真に新しいものは生まれてこない。「真の賭け」は，skill を背景に持っている点で philobatism と共通するが，philobatism が「調和」を目標とするのに対し，「真の賭け」は「創造」を目指すと考えられ，philobatism の世界を越えるものと思われる。

4. ま　と　め

以上，Balint の ocnophilia と philobatism の考え方を一つの軸に，「賭け」の現象をもう一つの軸にして，心理療法において生起する現象を考察してきた。そのとき，心理療法における治療者側の体験を分析することに主眼を置いた。いまだ十分に論じられなかった部分も多いが，今回は一つの試論として提出してみた。

注

1) 「賭け」の英語訳としては“Gamble”がまず考えられるが，これは主に「賭け事」を表わすため，この論文の主旨からすると不適当であると思われる。その他“bet”“stake”などもあるが，いずれも「賭け」に比して意味が狭い。そのため「賭け」の2面を共に表わしうるものとして表記の意訳を行ったが，これも日本語の「賭け」が持つ意味の深さと広さは表わせないと思われる。「賭け」に相当することばが英語に見出せないこと自体興味深い現象であり，考察に価する問題であろう。

引用文献

Balint, M. 1959 Thrills and Regressions. International Universities Press.

Balint, M. 1968 The Basic Fault: Therapeutic Aspects of Regression. 中井久夫訳 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析 金剛出版 1978

Binswanger, L. 1947 Ausgewähte Vorträge und Aufsätze Band I Zur Phänomenologischen Anthropologie. Francke Verlag Bern. 荻野恒一・宮本忠雄・木村敏訳 現象学的人間学—講演と論文1—みすず書房 1967

荻野恒一 1983 賭けの現存在分析 青年心理36 金子書房, 100—108。

(本研究科博士後期課程)